

小坂元祐撰『十四経絡發揮広要』について

加畑 聡子

二松学舎大学大学院文学研究科博士後期課程／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室

【小坂元祐について】

丹波亀山藩医・小坂元祐〔?-(1815)、名は菅昇、号は牛淵〕は、江戸医学館の前身・躰寿館における百日教育時の経穴学講師であり、現在披見できる著作には、『兪穴捷徑』（1793年序刊）、『経穴纂要』（1810年序）、『十四経全図』（1812年序刊）、『刺灸必用』（1816年序）、『鍼灸備要』（書写年不詳）がある。その経歴及び著作については、拙稿「江戸医学館官立化時期における小坂元祐の経穴学教育」（『伝統鍼灸』43巻第1号掲載）で明らかにし、『兪穴捷徑』を『経穴纂要』の先駆となる書として位置づけたが、今回、新たに小坂元祐の著作と見られる『十四経絡發揮広要』（写本・長野仁氏蔵）が発見されたので、両書と比較検討し、考察する。

【『十四経絡發揮広要』の概要】

『十四経絡發揮広要』には、首から1805年西村広淵序、1800年小坂元祐自序、「引書」、内容としては「骨度」があるのみで、経穴や経絡についての項の記載は見られない。西村序によれば、元祐は安永期に水戸藩医西村広淵と躰寿館で知り合い、弟子である西村元春を通じて本書の序文の執筆依頼をするなど、両者の親交を窺い知ることができる。また、自序には、「夫古昔、論経絡者、雖多、其大要皆本于素靈立旨。然其書、幽遠簡古浅学者非所易通曉矣。」とあり、『経穴纂要』自序には、「古昔、論経絡者、雖極衆多、其要皆本於素靈矣。而素靈之為書、幽遠簡古、多不可得而通曉者、則其本之之論、亦多不可得而通曉者、則固矣。」と記されるなど、両書に文字の異同はあるものの、昔からの経絡理論に基づいている、深奥で古雅な『素問』『靈樞』に通曉することの困難さについて述べているという点で一致している。

また、『十四経絡發揮広要』自序には、「後迄明滑寿著十四経發揮也、人多以是為宗。予不肖、勤苦於此道有年。今以滑氏為基本、傍保群書、而考異同、苟便其撰穴者、捨取以補入。」とあり、『経穴纂要』自序には、「故世人多以滑伯仁十四経發揮為便。……予不肖勤苦於此道有年。于茲今以滑氏為基本、旁探群書、考異同、取舍折衷、以便于推経絡、取腧穴。」と記されるなど、両書とも当時簡便な経穴書として流布していた『十四経發揮』を基本とし、諸書によって考証したことがわかる。また、『兪穴捷徑』自序には「特滑寿十四経發揮專行于世。取経揆穴之徒、取繩墨于此。遂以為万世不易之法也。然兪穴之數脱者十有一穴、今參考諸書、補發揮所脱漏之穴、然後、氣府論所謂氣穴三百六十五之數、始得全矣。」とあることから、三書とも『素問』『靈樞』を尊重すると同時に、『十四経發揮』に対する問題意識があったといえよう。『十四経絡發揮広要』「骨度」の冒頭に「出靈樞骨度篇第十四」とあるように、『靈樞』骨度篇を基本とする点は『経穴纂要』「骨度」と一致し、『兪穴捷徑』よりも多数の本文を掲載している。また、『十四経絡發揮広要』「引書」には132部の医書名が見られ、『経穴纂要』「引書」に記載される95部より多く、古人の説として『経穴纂要』が引く菊池玄蔵、安井元越、宮本春仙、中島元春、浅井頼母、村上宗占、堀元厚、饗庭東庵に加え、山本玄通、谷村玄仙を引用するなど、より広く詳細な注釈をつけている。

【考察】

『十四経絡發揮広要』には、『経穴纂要』や『兪穴捷徑』と著述の意図は一致するものの、より広範にわたる引用による注釈がつけられていた。その背景には、『兪穴捷徑』より実証性の高い考証に基づく経穴書製作の試みがあり、その後、『経穴纂要』として刊行に向けて簡略化される前段階となる草稿が『十四経絡發揮広要』であると考えられる。本書は、『兪穴捷徑』から『経穴纂要』刊行に至るまでの編纂過程を知ることのできる好資料といえる。

※『十四経絡發揮広要』原文の誤字は、私見によって改めた。

本研究は、武田科学振興財団2013年度杏雨書屋研究奨励「江戸医学館を中心とした近世後期の医学公教育の形成」、科学研究費助成事業平成25年度基盤研究（B）（一般）研究課題番号：25282066「近世後期の医学塾からみる漢蘭折衷医学の総合的研究」による成果の一部である。